

防人の歌

年 組 氏名

◆防人とは

防人は七世紀の中ごろ、唐の制度に習って設けられた九州・対馬・壱岐の守備隊の兵士である。正式には「ぼうじん」と読むが、崎守、つまり国の突端を守る人という意味で、和語としては「さきもり」と呼ばれた。

万葉集でいえば後期、八世紀中ほどの奈良時代になると、わが国には、公地公民制を基盤とする律令国家が完成してはいたが、毎年のように襲った干害（日照り）と飢饉、天然痘の大流行に苦しめられた。そうした中でも、いつ押し寄せてくるかもしれない唐や新羅に備えて、防人による西方の守りを固めねばならなかったのである。

防人として動員されたのは、相模・上総・常陸・下野・下総・上野・武蔵といった坂東諸国に、遠江・駿河・信濃を加えた十か国の農民男子で、総勢約二千人。いわゆる単身赴任で、役人に引率されて難波の港に集められ、そこからは船に乗せられ、筑紫の大宰府など任地へ運ばれた。難波までの食料は自弁である。任期は三年で、三年ごとの半数交替が、一応定められていた。

彼ら防人のだれもが、農家の貴重な働き手であった。農家は租・庸・調という毎年の重い税を負わされているほか、男子には、徭役といって、年間何十日もの労働が課せられていたことを考えれば、防人という任務がどんなにつらく大きな負担であったか、推察できよう。

◆万葉集に収められた防人の歌

巻二〇に九三首あるほか、巻一四の東歌も防人の歌を七首含んでおり、巻一三にも防人の妻の歌らしい二首がある。これらを合わせると、一〇二首である。

巻二〇の九三首は、天平勝宝七（七五五）年、兵部少輔として、難波で防人の点呼をとって乗船させる任務に従事していた大伴家持が、諸国の役人に命じて提出させたものを、選んで後に万葉集に収録したものである。作者名は一応記されているが、古くから伝わる歌、他人の歌、代作してもらった歌などを提出した者もいたにちがいない。それでも、万葉集に名もない農民・兵士の歌が収められたことは、すばらしいできごとといえる。

◆防人の歌を味わおう

防人の歌のほとんどは、当時の東国の方言やなまりで歌われ、そのまま万葉仮名で表記されている。それだけに都の皇族や貴族の歌には見られない地方色と、飾り気や気どりのない表現、素朴で力強い調べ、いつわりのない情感が胸を打つ。ここにとりあげたのは、わずか八首だが、この中にも、そうした特徴が感じとれると思う。

わが妻はいたく恋ひらし飲む水に影さへ見えて世に忘れず
（遠江・若倭部身麻呂）

「恋ひらし」は「恋ふらし」の発音がなまったもの。「かご」も「かげ」がなまった方言である。「世に」は、「まことに・ひじょうに」の意味の副詞。

〔大意〕 妻はひどく私を恋しがっているようだ。飲む水にまで彼女の面影が映って見えるので、どうにも忘れることができないよ。

大君の命かしこみ磯に触り海原渡る父母を置きて
（相模・丈部造人麻呂）

難波の港から船出して任地へゆく途中の歌。「大君の命」は、天皇の仰せ、命令。「かしこみ」は、つつしんで承って、ということ。「磯に触り」とは、海岸線をす

れすれに船で行くことを、実景を加味して表現している。

当時の船はもちろん木造で、風波にはもろかったから、なるべく陸地を離れないように航海した。心細さと、父母恋しさの切ない思いがにじんでいる歌だ。

〔大意〕 省略。

吾等旅は旅と思ほど家にして子持ち瘦すらむわが妻かなしも
（駿河・玉作部広目）

「わろ」は「われ」の東国方言、「おめほど」も「おもへど」のなまり。「いひ」も同じ。「イ」と「エ」がきわめて似た音で発音される傾向は、現代でも広く東北、関東、北陸などに残っている。

〔大意〕 自分の旅は、任務で行くのだから仕方がないとあきらめているが、家に残してきた妻は幼子をかかえてやせ細ってゆくだろう。かわいそうでたまらないなあ。わが母の袖持ち撫でてわが故に泣きし心を忘れぬかも
（上総・物部乎刀良）

「袖」は母の袖ではなく、作者の袖を母が手にとって泣いたのである。「忘れぬ」は「忘れられぬ」と同じ。

〔大意〕 防人に私が行くのを悲しんで、母が私の袖を手にとり撫でながら泣いた、その心が忘れられない。

防人に発たむ騒ぎに家の妹が業るべき事を言はず来ぬかも
（常陸・若舎人部広足）

「家の妹」は、妻である。「業る」は、一家の生業を営むという意味の動詞。生業を意味する「なりわい」という名詞は、今も時々使われている。急に防人として召集されたので、出発さわぎにまぎれて、農作業をする上で大事な注意を、あれこれと妻に言い置いてくることもせずに出てきてしまったよ、という嘆きの歌である。

〔大意〕 省略。

今日よりは顧みなくて大君の醜の御楯と出て立つわれは
（下野・今奉部与曾布）

「醜の」は「みにくい・粗末な」という意味で、天皇に対して自分の身をへりくだって、こんな言葉を用いている。「楯」は敵の矢や刀を防ぐ武具。この一首は、さきの太平洋戦争中には、全国津々浦々の学校で教えられたので、戦時の体験を持つ人には、忘れようとしても忘れることのできない歌である。全体から見ればごく少数だが、こうした勇ましい歌の存在も無視できない。

〔大意〕 防人として出征する今日からは、わが身や家族のことをふり返ったりせず、天皇の粗末な御楯、一兵士として、家を出て行く。私は。

唐衣裾に取りつき泣く子らを置きてぞ来ぬや母なしにして
（信濃・他田大島）

唐衣は中国ふうの着物で、ふつうは「からごろも」。単に「着る」「裾」などの語の枕詞としても使われる。

〔大意〕 防人として出て行く私の裾に取りすがって泣く子供たちを、置いて来てしまったよ、母親なしに。

防人に行くは誰が背と問ふ人を見るが羨しさ物思もせず
（作者不明）

これは、防人の妻、あるいは恋人の歌。

〔大意〕 防人に行くのはだれの夫（恋人）かしら、などと、気楽にうわさ話をする女たちを見るとうらやましい。私の夫（恋人）が防人として、出発しようとしているのに。